

映画の小箱

月が輝くテキサスの草原の中、お互いに強く魅かれる2人の姿。しかし、2人を別つときがやってくる…。

『草の上の月』 傷つき揺れる愛を、 月がいつも見守っていた

金丸弘美=文
text by Hiromi Kanamaru

テキサスの景色のなんと美しいこと。そしてそこに暮らす人々の、家、たたずまい、調度品、車、ファッション、ヘアスタイル、どれもが素晴らしい。すべてが見事に調和しているのだ。ややセピア調にみえる全体のトーンは、心を和ませ、そして誰しもが持っているだろう、過ぎ去っていった大切な人生の一瞬间を思い出させてくれる。

なにより素敵なのは、主人公たちの心の微細な揺れ動きと一体化したような、豊かな自然の情景の描写だ。

そして移り変わる自然の四季のように、登場する人々の恋も感情も人生もゆらめく。それらはときにきびしく、ときに甘く、ときに華麗に、ときに雄大に、さまざまに顔を見せ、平穏に流れるかのような人生にも、思いもよらないできごとが立ち現れ、しかし、人々も自然も、それらを乗り越え、長い道を歩んでいくのだということを、さりげなく教えてくれる。

これは実際の話がもとになっている。学校教師だったノーベリン・ブライス・エリスが、彼女が若かったときに、作家に憧れ、つきあったファンタジー作家ロバート・E・ハワード（一九〇六―三六）との思い出を描いたものである。

ロバートは、太古のキムメリオス人を主人公にした冒険小説『コナン』をはじめ、歴史物や西部劇、怪奇物などを、当時の安手の雑誌でパルプマガジンと呼ばれたものに連載していた。地元では変人と思われていた彼と、ノーベリンの淡く、切なく、しかしロマンに満ちた、もったもったいい時代の、これは物語である。

一九三三年、テキサス州、クロスブレインズ。茶褐色の草原、ところどころにヒマワリが見えるなかを、一台の赤いフォードがやってきました。車はノーベリン（レニー・ゼルウィガー）の家の前でとまった。彼女の友人が、作家のロバート（ビンセント・ドノフリオ）





を連れてきたのである。こうして二人は知り合った。

彼は小説を書いている。太古の筋骨隆々の男コナンが、あらゆる困難を乗り越えて旅をする物語だ。もともと、彼に言わせれば、一単語五十セントなので、自分は長編を書くというのだ。

ノーベリンの読むものといったら『コスモポリタン』か、『サタデーイブニング・ポスト』。彼とは話が合わない。しかし、小説に憧れる彼女は彼にひかれる。彼女が書きたいのは、日常の出来事や会話だ。

一九三四年。クロス高校の教師になって下宿したノーベリンは、友人の反対にも耳をかさず、変わり者、低俗な小説家と噂されるロバートに連絡をすることに。しかし、彼

の家にいつ電話を入れても、母親がでるだけで、取り次いでもらえない。じれたノーベリンは、友人たちの車で彼の家へと直接押しかける。友人を車において、彼の家に行ったノーベリンは、彼と会うことができたばかりか、とうとうデートの約束までする。

彼とは車でのデート。草原を走り、夜空にあがった月を見て語りあう。

「いい夜ね」

「美しい満月だろう」

「あなたが造ったの？」

「君のために用意しておいたんだよ」

ロマンチストのロバートの一面を知ったノーベリンは、すっかり彼に魅了される。そして、たびたびデートを重ねるのだ。

もともと、彼はシャイで、なかなか思うように自分を語れないところがあった。また、母が病気で、いつも母親につきそい、いまだに母親から離れられない一面もある。そしてシャドウボクシングをして町を走ったり、夜、突然訪ねてきたりと、奇行もあった。

それでもノーベリンは、彼を愛した。一方ロバートも彼女を慕った。しかし、ロバートは、自分の感情表現をうまくあらわせない。冒険小説の大胆さとはうらはらに、彼の心は、まるでガラスのように繊細で、いつも壊れそうだ。お互いに思いながら、せつなくもすれ違ってしまう二人。やがて、二人の人生を別つときがやってくる。それは、誰にでも訪れる、人生という波の一つなのかもしれない。

まるで、動くノーマン・ロックウエルの絵の中に踏み込んだような、アメリカのもっともよい時代の暮らしとロマンス。それらがテキサスの自然と、渾然と溶け合って、見事なアートを見せてくれるようだ。

『草の上の月』

(アメリカ) THE WHOLE WIDE WORLD

監督=ダン・アイルランド

出演=レニー・ゼルウィガー/ビンセント・ドノフリオ

3月28日よりシネマ・カテにて公開